

三溪園 臨春閣玄関から修理工事中に戦前の遺構を発見！

2022年秋、三溪園完成100周年記念に建物内部を特別公開予定

国指定名勝「三溪園」（所在地：横浜市中区）では、重要文化財「臨春閣」の保存修理事業（以下、同事業という）の一環としておこなっている耐震補強工事において、戦災により失われたとされていた玄関棟の床が発見されました。平成30年から続いた同事業は今年8月に完了を予定しており、今秋には同事業の完了および三溪園完成100周年を記念し、通常非公開の建物内部とあわせて本遺構を特別公開予定です。



■三溪園のなかでも中心をなす臨春閣

臨春閣は、三溪園内苑の中心となる重要文化財建造物で、江戸時代初期に紀州徳川家の別荘として建てられたとされています。明治39年に三溪園の創設者・原三溪が入手した当時は、豊臣秀吉が建てた聚楽第の遺構と考えられていたことから、原三溪は「桃山御殿」と呼び、秀吉ゆかりの美術工芸品で室内を装飾して日々の生活を楽しみました。移築が完了した大正6年には、長男・善一郎の結婚式が執り行われるなど、園内でも特に重要視されていた建物でした。室内は、数寄屋の意匠を取り入れた書院造りの旧態を残し、各部屋からは三重塔や周辺の景観を存分に眺めることができ、外観の美しさのみならず、内部から見る風景にも注目が集まります。

本建物については、平成30年度から主に檜皮葺屋根（ひわだぶきやね）・柿葺屋根（こけらぶきやね）の経年劣化の補修を目的とした保存修理工事を実施し、あわせて耐震診断・補強工事も実施され、昭和の戦災を乗り越え守り継がれたこの建物を、さらに末永く守り伝えることを目指して工事を進めています。

■耐震補強工事のなかで発見された遺構～発見の経緯

戦前の玄関棟の床の遺構は、今回の耐震補強工事とともに作業過程で発見されました。修理工事とともにおこなっている耐震補強工事では、耐震壁と鉄筋コンクリートの重石を設け、両者を繋ぐことで揺れが発生した際に建物の浮

き上がりを防ぐ方法をとっています。その重石を地中に設置するため、床板が張られていない玄関部分については地面を直接掘り下げる必要がありました。そして表面のモルタルを取り除き深くまで掘り進めようとした際に、戦災によって失われたとされていた四半敷き（石や瓦を縁に対して斜め四五度に敷き詰める技法）の黒い石張りの床が現れました。



(写真：発掘された遺構。モルタルの下から黒い石張りが現れた)

三溪園には戦前の園内の様子を伝える写真が残されており、「かつての臨春閣の玄関棟内部は現在とは違っていた」ということ、「玄関棟は臨春閣のなかでも原三溪が同建物を移築した際に増設した箇所である」ということは知られていました。その後昭和20年の戦災により臨春閣は大きな被害を受け、戦後の復旧修理事業の記録においても「玄関棟部分は新規に建設した」と記述されているのみであったことから、戦前のものは一切遺されていないと考えられていましたが、今回地下掘削を行ったことから図らずも遺構が発見されたのです。



(写真：戦前に撮影された玄関棟内部の様子)



(写真：戦後の被災状況。手前部分に玄関棟が存在していたが、すべて破壊されてしまっている。

<写真提供：奈良文化財研究所>

■保存修理の難しさと、歴史を守り伝えることの重要性

文化財の保存修理では、できる限り従来の材料を遺し、新たに追加する建材についても違和感なく溶け込むように様々な工夫を施します。今回の臨春閣の保存修理事業においても、見た目を大きく変えることなく耐震補強を施すという難題に挑戦しています。今回の発見で、戦後の復旧修理工事においても遺せる限り戦前のものを遺そうとしたということがわかり、文化財を守り伝えていく立場として非常に大きな支えを得ました。三溪園ではこの発見を受け、

予定していた重石は室内側ではなく室外側に設けるなど工事計画を一部見直し、発見された遺構を保存することとしました。

■学芸員・原未織のコメント

四半敷さらしいものが見え始めたときは「まさか」と思いながらも非常に興奮しました。今回の修理は過去から受け継いだものをさらに未来により良い形で遺すために行っているもので、昭和の修理に携わった人たちも同じようにできる限り遺せるものを遺しながら工夫を凝らしていたことが分かり、より一層現在行っている工事や受け継ぐことの重要さが身に染みんでいます。

文化財を守り伝えることは生涯続くバトンリレーのようなもので、今バトンを持っている私たちには次の世代へと受け渡す使命があり、同時にバトンを持って走ることの楽しさと嬉しさがあります。今回発見された遺構を通じて、多くの皆様にもこのバトンリレーに参加していることを実感していただき、建物自体のすばらしさに加え、守り伝えることの喜びに共感していただけたら嬉しく思います。

■臨春閣に関連する年表

慶安2年	紀州徳川家の別荘として建てられる
大正6年	三溪園に移築完了。移築に伴い玄関棟部分が新築される
昭和6年	国宝に指定（現・重要文化財）
昭和14年	原三溪没
昭和20年	第2次世界大戦で被災。玄関棟は跡形もなく破壊されたとされる
昭和31年	戦後の復旧修理事業開始（昭和33年終了）。「玄関棟部分は新規に建設した」と記録される
平成30年	臨春閣の保存修理事業開始
令和4年4月	三溪園に移築した際に新築した玄関棟の床が発見される

■今秋の特別公開では、今回発見された遺構も公開

三溪園内の三溪記念館展示室では、臨春閣の保存修理事業にまつわる工程や技術を、学芸員の描いたイラストとともにご紹介するパネル展を8月8日まで開催中です。また、今秋開催予定の臨春閣の特別公開では、通常非公開の臨春閣内部とあわせ、このたび発見された遺構も見学いただけます。

明治～大正にかけて原三溪が守り築いた文化遺産が昭和修理の際にも文化財修理として適切な処置がとられ、その後三溪園で大事に守り伝えられてきたからこそ、今回の発見とお披露目につながることになりました。刻まれた歴史に思いをはせ、三溪園が受け継ぎ続けている価値をこの機会にお伝えします。

特集展示『重要文化財 臨春閣 令和の大修理まるわかり！』

日程 | 令和4年7月1日（金）～8月8日（月）

場所 | 三溪記念館 第3展示室

料金 | 無料 三溪園の入園料別途



◆三溪園について

三溪園は生糸貿易により財を成した実業家・原三溪によって、1906年（明治39）5月1日に公開。175,000㎡に及ぶ園内には京都や鎌倉などから移築された歴史的に価値の高い建造物が巧みに配置されている。2007年（平成19）に国の名勝に指定。
（現在、重要文化財10棟・横浜市指定有形文化財3棟）

◆原三溪について

原 三溪（本名富太郎）（1868年/慶応4-1939年/昭和14）

岐阜県厚見郡佐波村（現在の岐阜県岐阜市柳津町）で代々、庄屋をつとめた青木家の長男として生まれる。幼少の頃から絵、漢学、詩文を学び、1885年（明治18）東京専門学校（現在の早稲田大学）に入学、政治・法律を学ぶ。1888年（明治21）頃に跡見学校の助教師になり、1891年（明治24）、原善三郎の孫娘、屋寿と結婚し原家に入籍。原家の家業を継ぐと、経営の近代化と国際化に力を入れ、実業家として成功を収める。住まいを本牧・三之谷へ移すと古建築の移築を開始し、1906年（明治39）三溪園を無料開園。1923年（大正12）の関東大震災後は、荒廃した横浜の復興に力を注ぐ。三溪自身も書画をたしなみ、その作品の一部は、園内の三溪記念館に収蔵されている。



◆施設概要

施設名	三溪園（さんけいえん）
運営	公益財団法人三溪園保勝会
所在地	〒231-0824 神奈川県横浜市中区本牧三之谷 58-1
電話番号	045-621-0635
入園料	大人 700円 / 小中学生 200円 横浜市内在住の65歳以上 200円（濱ともカードの提示が必要）
開園時間	9:00～17:00（最終入園 16:30）
アクセス	JR 根岸線根岸駅から市営バスで10分「本牧」下車 徒歩10分 横浜駅東口から市営バスで35分「三溪園入口」下車 徒歩5分
公式HP	www.sankeien.or.jp
Instagram	www.instagram.com/sankeien_garden
Twitter	twitter.com/HSankeien



本リリースに関する報道関係者からのお問合せ

公益財団法人三溪園保勝会 事業課 広報担当 岩本・加藤

TEL：045-621-0635 / FAX：045-621-6343

MAIL：iwamoto@sankeien.or.jp